

世界にアピールした1993年宮崎大会 “往年の顔”が一堂に

弥生。3月といえば3日の「ひな祭り」。女の子のいる家では、ひな人形を飾り幸福を祈る日がひな祭りだ。5日は冬ごもりをしていた虫が外へはい出す日とされる啓蟄。12日は深夜にクライマックスを迎える奈良東大寺二月堂のお水取り。お水取りが終われば“春が来る”といわれている。20日は彼岸の中日。春を呼ぶ3月だが、新型コロナウイルスに注意され、トラックシーズンに備えたい。

78カ国・地域から12,000人

前年の3、4月号でマスターズ陸上のレジェンドを何人か紹介したが、今回は中・高齢者の“熟練アスリート”が世界各地から宮崎に集まった第10回世界ベテランズ（当時）選手権を振り返ってみたい。

このイベントは1993（平成5）年10月7日から17日までの期間、宮崎市で開かれた。参加は世界78カ国・地域から、国際マスターズのルールどおり、男子40歳、女子35歳各以上の男女約12000人。競技とは別に驚かせたのは、連日メインスタンドにほぼ満員のギャラリーが詰め掛けたことだ。11日間（うち2日間は競技休み）声援と拍手で会場はにぎわった。

開会式には秋篠宮・紀子さまご夫妻が出席された。炬火台に点火をしたのは青木平治日本陸連会長だった。選手宣誓はマラソンで鳴らした広島日出国さん（当時55歳）と、短距離選手として活躍した斉藤（旧姓・松下）さゆりさん（同44歳）。広島さんは「生涯青春、生涯健康を求めて競技し、世界に友情の輪を」と高らかに宣誓。斉藤さんは英語での宣誓を。

当時の青木陸連会長は78歳。昔とった杵柄と45年ぶりにM75・砲丸投のサークルへ。7m42を突き出したがトップ8へは届かなかった。「うーん、風邪気味で体調が万全でなかった。でも、スポーツで流した汗は素

晴らしい」と、ご機嫌だった。

青木陸連会長と同じ早大競走部OBで、1928年アムステルダム五輪の投てき代表だった沖田芳夫さんはM90・円盤投、ハンマー投に。同クラスには競い合う仲間はなく、独りぼっちの競技となり、円盤投9m38、ハンマー投12m10でこちらは1位。

だが、砲丸投は91歳の堤一彦さん（福岡）との争いとなり、5m10の堤さんに凱歌。沖田さんは4m11だった。相手に勝ちを譲ったとはいえ、背筋を伸ばして突き出す沖田さんのフォームに往年の姿を垣間見た。

殿堂入りのスーパースターも

宮崎大会のスローガンは『競いあう技に年輪 心に若さ』。全国3954件の中から選ばれた。このスローガンの下に競ったなかには、2011（平成23）年に創設された『マスターズ陸上殿堂』の競技者表彰受章者の一人、森田真積さん（茨城）がおり、当時80歳でM80・走幅跳に出場。

予選で3m96、決勝で4m12まで伸ばして、それまでの世界記録3m95を破った。2位の須田義一さん（81歳・東京）も3m98で世界新をマーク。森田さんは棒高跳に2m30、三段跳も8m95で制した。

なお、森田さんが『マスターズ陸上殿堂』入りしたときは93歳。走幅跳と三段跳で9度の世界記録を樹立、世界・アジア・全日本各マスターズ選手

権での金メダル獲得数101個の功績が認められての殿堂入りだった。

森田さんともう一人、『マスターズ陸上殿堂』入りしたのが田中重治さん（山梨）だ。田中さんも競技面で活躍しながら、日本マスターズ創設時から理事を務め、文事面での協力が大きかった。当時、87歳の田中さんが宮崎大会に出たときはM70クラスの年齢。走幅跳4m80、三段跳9m56で各1位。棒高跳2m70で2位の健闘をした。

オリンピックの顔も登場 往年の杵柄を披露

アジアの鉄人の称号を持ち、現日本マスターズ連合副会長の室伏重信さん（48歳・中京大教授）がM45・ハンマー投に登場。その頃は75m96（1984年）の日本記録保持者。だが、1986年の第10回アジア大会で5連覇して以来、競技を中止しており、7年ぶりに再開、今大会に備えて投げ込んできた。

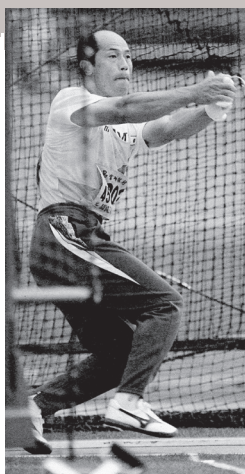
その成果が出た。2投目に振り切りのタイミングがぴたりと合い、ハンマーがぐーんと伸び、ベストは62m98の地点へ。さらにベストは63m46。この瞬間のスタンドからの「オー」という驚きに似た声の響きのすごかったこと。62m52を破る世界新への一投への反響の大きさを認識させられた。

当の室伏さんは「この会場は息子（広治）が昨年のインターハイで2連覇したところなので、ゲンが良かった。自信はありました」と笑顔で。

一方、3000mSCで日本選手権を9



円盤投M90出場の沖田芳夫さん。1928年アムステルダム五輪では砲丸投、円盤投、ハンマー投代表



室伏重信さんはM45ハンマー投に出場。世界新の記録を見た



W40三段跳では大日向暁子さんが優勝

1962（昭和37）年に400m59秒5と、日本人女性初の“1分切り”の日本新をマークしている。

宮崎大会までに、女子優秀選手に第1回大会と第6回大会で輝いた渡川さん。現在W75・走幅跳3m64（2019年）のクラス別日本記録保持者だ。

走幅跳といえばW40クラスに5m44で1位となった大日向暁子さん（長野）も、途切れることなくマスターズ陸上の顔として活躍中。宮崎では三段跳でも12m00と断トツの強さで表彰台に上がった。振り返ってみると1966（昭和41）年の長野・松商学園時代、第19回インターハイの走幅跳に勝って（5m66）以来、マスターズ陸上に移行した現在の記録を見てみると――。

W60・60m8秒90、W45、50、65（4m18）・走幅跳、W40、45、50、55、60、65（9m81）・三段跳、W65・立五段跳11m67（2019年）と各クラスで数々の日本記録を残している。



W80・砲丸投に4m10で4位になった大会幹部・日本選手団顧問、1932年ロサンゼルス五輪三段跳の覇者である南部忠平さん夫人の久子さん。「とても楽しかった」と一言。

まだまだ活躍したレジェンドは大勢いるが、スペースの都合で紹介できないのが惜しい。改めて機会があれば宮崎大会のマラソンにも触れてみたい。なお、ここに出てくる選手の中にはすでに亡くなれている方もいる。過ぎ去った大会をしのびご冥福をお祈りしたい。

文中、年齢は当時のまま。

連覇（1947～55年）し、1952年ヘルシンキ五輪代表だった高橋進さん（72歳・神奈川）がM70・2000mSCで力走。9分27秒35でジョーンズ・イオリス（ニュージーランド）に次いで2位に。

跳躍ではM55・三段跳の桜井孝次さん（57歳・茨城）。1956年メルボルン五輪から64年東京まで3連続五輪に出場した三段跳の名手。現役時代のフォームを思い出させるきれいなジャンプを披露したが、11m89で3位と4cm差の4位だった。「世界ベテランの雰囲気はなかなかのものですね」と桜井さん。当時は、日本実業団連合の理事長だった。

変わり種は2000mSCのM60クラスに初挑戦した福留義秀さん（60歳・宮崎）だ。1964年東京五輪の近代五種に出て17位だった。地元開催の舞台では8分45秒43で21人中、トップ8へ食い込んだ。

2019年9月に群馬県であった第40回記念国際・全日本マスターズ大会のM95・砲丸投と円盤投に出場、砲丸投2m69で2位、円盤投は1人でサークルへ立ち、5m85で表彰された肥田一郎さん（99歳・宮崎）が、26年前の世界マスターズにも姿を見せていた。当時は73歳。砲丸投8m52、ハンマー投19m68で日本人だけの順位は6位と5位だった。

サロンパスで知られる久光製薬会長

の中富正義さん（87歳・佐賀）はM85・10000mに。これまでマラソンはじめ、ロードレースでは知られた顔だったが、今大会ではトラックレースに初挑戦。レースには相手がなく、1時間37分50秒00で“単独優勝”した。

女子陣も華やかな顔触れ

日本陸連女子委員長で1956年メルボルン五輪の走幅跳代表だった浜松（旧姓・高橋）ヨシ江さん（東京）がW60の同種目に出場した。走幅跳には和歌山での第10回全日本マスターズ大会以来、4年ぶりの登場だった。往年どおりの“そり跳び”で3m98の4位。3位とはわずか1cm差だった。「久しぶりに跳んだけど、まずまずだったかな」と、にこやかな表情で。

W50・200mは28秒37で3位だったが、走幅跳では4m81で1位の表彰台に上がった渡川孝子さん（徳島）は「まあまあのお出来」と。渡川さんは京都・光華短大、旧姓・林時代の

お知らせ

マスターズ連合事務局が移転

公益社団法人 日本マスターズ陸上競技連合の事務局が2020年1月27日に、東京都江東区亀戸から、〒104-0061 東京都中央区銀座8-10-7東成ビル4階に移転した。TEL03-6263-9911、FAX03-6263-9912

ホームページ

<https://japan-masters.or.jp/>

メール

jma@japan-masters.or.jp

最寄り駅は新橋駅・徒歩5分、銀座駅、東銀座駅、築地市場駅、各徒歩7分